

「公私日記」に見る江戸天保期の村の助け合い

増 田 淑 美

I. はじめに

武蔵国多摩郡柴崎村年番名主の鈴木平九郎執筆「公私日記」という史料がある。この日記から大きくは近世の江戸と多摩地域について考えてみたい。また村の助け合いの実態および幕府の対応はどうであったのかを本稿の考察の対象としたい。

考察の範囲は、書き出しの天保 8 年 (1837) から 10 年までの 3 年間に絞って考える。その理由は荒川秀俊氏の天保 7 年の飢饉の後、天保 8 年の端境期には夥しい死者が出たという説を小稿で見ようと考えたからである¹⁾。

なお「 」の中は引用文、()の中はその要約文とする。

武蔵国多摩郡柴崎村の地域性については、近世農村経済史の研究者伊藤好一氏の「江戸と周辺農村」から学ばせて頂いた²⁾。伊藤氏は「巨大な消費都市が生産諸力の低い関東平野に突如として出現したという近世初頭の江戸の成立過程から、江戸周辺農村は江戸を支えるものとしての期待は到底もち得なかった。江戸で必要とする主要物資の供給は、主として周辺農村以外から求められ、周辺農村はこれを補う存在に過ぎなかった」と関西地方からの“下りもの”が良質で大量輸送だった事を説明される。同時に江戸の持つ城下町と商業都市の二重の性格と、それを併せた大市場としての地位は、江戸と周辺を結びつけるのにはじめのころは武家生活を媒介とした。

多摩の歴史的な特異性の一面は寛永 5 年 (1628) に將軍鷹場が設置されたことである。元禄時代の生類憐み令で一時中断されたが、同 10 年の御三家鷹場設置で、生産上の制限と夫役負担や、鷹場管理維持上の負担を負った。また江戸城本丸や西の丸御膳所で消費される多摩の菜園場の一つは府中に設置された。この御前栽瓜畑は、元和 3 年 (1617) 8 反歩が享保 2 年 (1717) に 2 反歩に縮小された。

特定農民は武家屋敷下肥汲取りの権利を持ち、秋に野菜を納める「御用達商人」となる。それが少しずつ村の生産物で江戸周辺農村と江戸の関係を持ち、やがて拡大していく。

享保以降は町人と周辺農村の関係が新たに展開される。幕領における享保新田開発により、それまでの肥料用下草供給地であった村の共有林や共有地が減少した。多摩では 82 ヶ村新田村が成立。代わりに金肥の糠や干鰯が導入されて、町人たちの穀物問屋が肥料も扱った。やがて米・穀物問屋の扱い商品以外に、在方で水車利用の小麦粉を主に扱う農間穀物商人も出てきて、糠や干鰯を扱い始める。

安永・天明頃から村方に農間肥料商人が生れて、秋の畑に大・小麦の種蒔き時には肥料を前貸し、収穫物で 2 割からそれ以上の利子を取る方法で決済した。江戸穀物問屋商売と同様になる。幕府の問屋重視政策で他の商品も問屋組合を通す形になり、町人と周辺農村との関係が、それ以前の武家屋敷との関係から、町人と強力かつ密接に関わる商品生産へと変化した。

近世中期以降は、多くなった長屋の家主（大家）が共同便所の屎尿を処理する権利を持ち、周辺農民は下肥汲取を家主と契約した。それも町民と周辺農村との関係を強化した。

しかし幕末期には五品回送令に見られるように江戸問屋仲間を通さない直賣買が広がる。以上が伊藤説であるが、多摩地域に絞るとどうなのであろうか。

さらに大藤修『近世農民と家・村・国家』で論ずる中「大町念仏講帳」大町村田宮五右衛門年玄の貞享 2 年 (1685) からの記録分析から、18 世紀中・後期に記録量が飛躍的に増大したと述べる。「激動する歴史状況の中にあつて、民衆が自らの再生産活動・生活の場である「家」と地域社会を守っていくためには、変動する政治・社会・経済の動向をできるだけ正確に認識し、有効に対処してゆかねばならない」と述べる³⁾。筆者はこの論中、代官所・関東取締役所・火付盗賊改出役の情報ルートに注目した。まず天保 8 年から始まる鈴木平九郎「公私日記」の飢饉後の端境期に幕府（代官所）は窮民対策をどのように行ったのかをみたい。また村民はその対策をどう考え、対処したのかを見る。

○史料について

本史料は立川市の指定文化財であり、解読された資料集が昭和 48 年 (1973) から年に 1 冊の割りで全 20 冊刊行されている。

更にそれは『立川市史』に紹介された。また個別研究は公私日記研究会会員中心に卒論なども含めて 100 本ほどになる。

「公私日記」は天保 8 年から安政 2 年 (1855) までの毎日の日次記である。安政 4 年・同 5 年は「公私見聞録」日記抄である。その最後は執筆者の母、中嶋春の死去で筆を擱く。平九郎 31 歳から 51 歳までの記録である。

日記の文体は和漢混交文。この日記の第一の特色は、鈴木家再興の過程を記録する事だ。第 1 冊の天保 8 年の表紙見返しに「夫日記は往事を搜るに安く 数百年の後といふ共□務形勢 猶見るがごとし」と認め、後の人々の参考にするという意図がある。他に弘化 3 年 (1846) の凡例には御用留と併読する事で理解が深まると記す。弘化 4・嘉永 2 年も同じ凡例を記す。

風評・巷説は真偽を糺さずに書き留める。毎日の天気の変化、十干十二支、農事、穀物・銭相場も記載する。

記録法は 5 回の変化がある。

- a 天保 8 年 6 月中旬までは形が定まらない。

- b 6月中旬から、月日、天候、公用（上意下達の触れ、廻状、役人の往来、年貢関係
其の他）。人の往来、生死、病気、婚姻等村用の一切。家庭内の事、農業経営一切
（農作物、農地名、下男下女の農作業、労働時間）などが順不同で記される。
- c 天保9年1月9日から各項目ごとに丸印がつく。公私が混同され、同内容が○印2
つで記されていることがある。同年から二四節気や時刻も加わる。
- d 天保11年から△印で江戸の風評や、他国の出来事が一日分の終わりに記される。
- e 嘉永5年(1852)後は、農事や家庭の記事は省略。

全く変わらないのは、年頭にその年の各月の大小や閏月が記される。また穀物相場については、情報収集の限り記載される。

書誌学的には、大判美濃紙 100 枚前後の和綴じ。本文中に筆者が日記を年末や元旦に綴じた記事がある。

○柴崎村について

立川市は第二次大戦中の空爆によって史料の殆どを焼失。「村鑑」や「宗門人別帳」も伝存していない。天保時代に近い「新編武蔵風土記稿」を中心に述べる。

「(多摩)郡の中より東にあり。地形平陸にして(略)陸田多く水田少なし。東は青柳村、南は多摩川を隔てて日野本郷、西は郷地村、北は砂川村に隣接。東西凡三十町余、南北二一町程」民家 248 軒。幕府直轄領と中川氏領 10 石余と普済寺領 20 石の入会地。甲州街道の日野宿の助郷村。「天保郷帳」の石高は 1,139 石余。宝暦 9 年(1759)の戸数 239 軒、人口 1,065 人。宝暦元年から尾張藩の鷹場となり、寛政 6 年(1794)鳥見陣屋が設置される⁹⁾。

○筆者、鈴木平九郎について

第 12 代鈴木平九郎は柴崎村の相名主中嶋家第 11 代次郎兵衛の子供である。安永 5 年(1776)鈴木家は「持高百六拾式石 馬式正持 材木商売仕候」とある。なお中嶋家は「持高百六石 馬式正持 蔵壺つ」と記す⁹⁾。

平九郎は文化 4 年(1807)生れ、元治元年(1864)没。享年 58 歳。

鈴木家の先代が文化 12 年に没して以来、空跡になっていたが、「天保六年十一月廿日に養家を継ぐ」と天保 8 年の凡例に記す⁹⁾。

妻嘉代は平村(日野市)名主平魯輔の娘で、養家を継ぐ時期に結婚と考えられる。この夫婦は子供 8 人に恵まれる。

下男・下女による農業経営と、江戸向けの商品を馬方を遣った運送業と農村金融業を行う。広域な婚姻圏、経済圏、文化圏、重層的な村連合の名主ネットワークが情報源である。

他村の名主達との交流は、俳諧、蔵書の貸し借り、漢詩、書道と幅が広い。

II. 天保 8 年から 3 年間の夫食拝借と返済そして差出金

夫食とは近世農民の食料である。天明飢饉後の天明 8 年 (1788) から江川太郎左衛門支配所では飢饉の備えに保存性の高い稗・粟で貯蔵した。飢饉の時に、困った人は代官所に嘆願して、貯穀蔵（本来は年貢米を一時納めて置くための蔵であるが、武蔵野新田畑の多い多摩地域は金納なので救荒用穀物の貯蔵庫。毎年何分の一かは新しい収穫物と交換）から拝借という形で稗・粟を毎日の生活に充当する。その理想的な貯蔵は全村民が飢饉時に 100 日間しのげるだけの石数とされた。

平年作になると、現物で返済計画に沿って返済するが貯穀詰戻しと呼ばれた⁷⁾。

3 年間の社会的背景について、諸先学の社会経済史の蓄積を念頭に置いて「日記」から拾い出してみよう。

○天保 8 年

天保 7 年の冷害凶作で天保 8 年の柴崎村は村内に貧窮民が約 100 人存在する。それは人口 1,000 人余の村の 1 割に達する。勿論個人的な理由で貧民に転落した人は飢饉と関係無く増加していた。しかし不安定な農業経営は、天災時は多分急増したと考えられる。

8 年の甲州街道をゾロゾロと群れて通過する鳥追いの穢多 200 人余、瞽女 3 回で 18 人、乞食や行倒人、浪人一家、巡礼一家などがいた。「日記」に大塩の乱の記事 3 回があり、人相書も転載してある。同じく 3 月 御救小屋の記録。「日記」4 月に將軍家斉が西之丸へ移る。5 月貨幣改鑄。それまで「日記」の（順気にて豊作）が「八月十四日 前夜の大暴風雨で被害」が具体的である。この大暴風雨被害が後の貯稗の延期に繋がる。「日記」(9 月 新將軍御大札町入り能見物に平九郎たちも出府)と特別な恩典の名誉を詳細に記す。11 月 2 日国々御領所(12 月 翌年の巡見使派遣の前触れ)を記す。この年村内の病死は 12 人、欠落者は 3 人である。この人数に関しては同年の他村の記録との比較が必要である。

○天保 9 年

「日記」(2 月公式布告巡見使派遣)がある。(3 月 西の丸焼失)の記事。西の丸再建に付き諸大名に手伝い命令。万石以下には上納金の命令が年表にある。

「日記」(4 月 1 日巡見使一行が日野宿昼食で柴崎村役人や人馬が駆出された)ことを皮肉な目で(本来の民情視察はどうしたのか)と記す。同日の最後に百姓・町人にも西の丸再建費用手伝いの触れを書き留める。「日記」の(4 月 8 日柴崎村に疫癘(流行病)が広がり、)その 1 週間後に(病除けの共同祈願)を記す。「日記」には江戸の大きな出来事、例えば火事や地震などを短く記すが、(4 月 日本橋・神田の火災 西の丸普請小屋も焼失)と記述。

「日記」(閏 4 月 町人・農民に儉約令が出る。櫛・簪などに金銀使用禁止令の記録。衣食住儉約令)後の天保改革の始まりが解る記事である。

「日記」(5 月 24 日 前年の甲州郡内一揆の裁決)の記事がある。貨幣改鑄の触れ等で幕

府財政を察知。(10月17日 佐渡騒動の風聞) この年村内の病死は24人、欠落者は無し。

○天保10年

「日記」(3月 小石川・駒込・麴町の火災)がある。「日記」(4月8日 御国恩冥加上納金)上納を代官所から触達ある。なかなか社会不安も経済状態も以前のように戻らない。

12月2日 水野忠邦が老中首座となる⁸⁾。この年村内の病死は21人、欠落者は2人、勘当願は2人。飢饉の後遺症がうかがえる。このような社会的背景であった。

日記には柴崎村にどの位の夫食が貸し与えられたのかの記録が無い。一般に30日ずつ3回迄貸付る。返済は5ヶ年賦で無利息。

夫食拝借再願書とは天保7年12月拝借夫食返済の貯穀の記事と一対で考えられる。

◎表1 天保8年、9年から夫食と貯穀について表を作成した。(論文末参照)

その内容は、2つに分けられる。以下は表番号の煩雑さを避けて、年月日で述べる。

夫食拝借が2回、行われた事がわかる記事。

天保8年1月2日 (以下天保という元号省略)「去年極月廿八日夫食相続拝借貸渡之
砌申渡置 年始之進物は相休ミ 年礼は不殘可相勤旨申触ニ付」
(7年12月28日に現物貸与した時に、凶作年なので年始の進物は
止めようと伝えておいた)傍点は筆者。

8年1月17日 (各村の夫食返済は延期願書を出そうと、年番名主中嶋次郎兵衛宅
で村役人が相談)

8年2月2日 (今晚現物の割渡しに立会証人として江川太郎左衛門代官手代の町
田亘殿出張される)

8年2月10日 (2月2日分を含めて日野宿の夫食拝借人の名簿を、柴崎村で町田
殿に提出)

8年4月9日 (それでも不足なのでまた拝借再願書を作ることにした)

8年4月17日 (名主宅で夫食拝借再願書に困窮民捺印)

8年4月18日 (村々差出金納付と夫食拝借再願書提出に次郎兵衛が江戸の代官役
所に出立)

差出金については表2で述べる。

8年5月13日 「夫食再拝借金四拾五両壹分余受取る」

8年5月16日 「夫食再拝借人別にて割渡す」

次は、端境期の夫食拝借再願の記事である。

7年12月28日と8年2月2日に現物貸与が2回。3月・4月は村内の救助で凌いだ。それでも不足なので再願拝借願書は、4月9日から記録は4回、提出は1回。5月13日に金45両が下げ渡れる。この金額は100人の窮民に取って麦収穫の6月迄のつなぎであろうか。

8 年 8 月 24 日 (今年は豊作だから夫食返済しなさいという触達)に村役人が会合。
8 月 14 日の台風による被害が甚大なので、どうしてもという事ならば、村の中以上の百姓で返却する事になるという内容の願書提出の相談がまとまる) 代官所に対して一種の圧力をかけたものか。

次は夫食拝借返済についての行動である。

9 年 6 月 1 日 (次郎兵衛が返済案を江戸代官所へ持参)
9 年 7 月 9 日 (次郎兵衛が関東取締出役から申渡された返済について、日野宿で寄場組合大小総代を集めて相談する。代官所管轄だけでなく)
9 年 7 月 11 日 (代官所管轄の村は村内畑面積の 30 分 1、稗を作付けし収穫後に詰戻しを命じられる)
9 年 7 月 12 日 (提出文の見本を写す)
9 年 8 月 20 日 (貯稗の提出書類の清書)
9 年 8 月 28 日 (寄場組合親村の日野へ夫食拝借人の名前と捺印の相談で次郎兵衛行く)
9 年 9 月 7 日 (今夜柴崎村の年寄会合 返済請書に夫食拝借人たちの捺印を申付る)
9 年 10 月 1 日 (代官所支配の近隣村々が日野宿に集まり、貯穀返済延期願いを相談)
9 年 10 月 9 日 (前日の相談の結果、貯穀年賦を半分の積み立てにして下さいという願書を持参して名主次郎兵衛が出府)
9 年 10 月 14 日 (代官所は作付け積立を許可。また天保 7 年暮の拝借分を今年から 6 年賦で積み立てる事と厳命された)
9 年 11 月 4 日 (拝借返納 6 年賦の窮民名前帳と村の控えを清書)
9 年 11 月 5 日 (前日作成の小前帳に各自が捺印)
9 年 11 月 18 日 (夫食拝借返納小前帳をもう 1 冊認める)
9 年 11 月 29 日 (天保 7 年暮と 8 年春の 2 回の返納予定分徴収、柴崎新田分も今日取立た。全部村役人が立ち会った)

夫食拝借の返済についての記事は天保 8 年 8 月から 9 年 11 月までに 18 回ある。その内会合が 7 回も開かれ、この返済問題がいかに困窮人にとって重要な事であったかを示している。代官所と、関東取締役所の両方からくる上意下達の圧力に抵抗して、自分達の要求を貫徹した。日野宿寄場組合 45 ケ村の大小惣代が 3 度も集まり話し合った。大きな枠組みでの結論は各村へ持ち帰り、柴崎村村役人 4 回話し合う。そして 9 年 10 月 1 日にまた日野宿で近隣村々が 2 つの願いを相談した。同年同月 14 日にその内容がわかる。1 つは先年拝借の分を今年から 6 年賦で返済したい、もう 1 つは貯稗に関して村の全畑面積の 30 分の 1 を稗で作付けしなさいという命令に対して 1 年間延期して下さいという願いである。同日両

方とも聞き届けられた。この問題は貯稗拝借した困窮民だけの問題では無く、全村民で詰戻しするのであるから、団結は強い。平等意識と自己主張が見える。多分小林茂説のごとく(寛政6年(1794)5月、幕府は村役人に対しての触達にみえるように、村方騒動が頻発して百姓の中でも貧農層を後盾にした新興中農層が、世襲名主・村役人達の村政を批判し、不正な村役人を糾弾する事件が増加)した事で平等意識と自己主張が芽生えたのでは無いだろうか⁹⁾。

百姓の言い分を村政担当者として単に伝えるだけではなく、利害を共にした姿が見える。

また代官所にとっては、困窮民を救助しない限り、農作物の再生産は出来ない。

農業を継続させない限り、次年度の年貢徴収は不可能である以上譲歩せざるを得ない。代官所の方も柔軟な姿勢を示す。経済問題であるのに関東取締役所が代官所に協力したところに職掌の拡大が見られる。以後関東取締役所は、開港後の外国人護衛から村方騒動まで、幅広く活動する。

11月29日には天保7年暮れと8年春の2回拝借分返納の穀物取立ての記事がある。年末の決算期、約束は実行された。

◎表2 差出金について

十一代将軍家斉の大御所政治で幕府財政は窮乏していたが天保飢饉後に下附金でなく、御貸付金とか、差出金とはどういう事なのか。江川代官蒞山役所に呼出されて出金を命じられている。

まず御貸付金とは、「江戸幕府より大名や町人・農民などに対する貸出金のうち、利殖を目的としたものをいう。幕府窮乏が著しくなった田沼期以後は貸付金が急激に増大したが、これは財政補填のための利殖を意味し、重要な金融政策だった」¹⁰⁾が、日記ではどのようなであろうか。表2の第一段階で述べられている。困窮人救助について関東取締役所と代官所から触られる。

次に差出金の割当がある。

- | | |
|---------|--|
| 8年3月14日 | (幕府は江戸府内に御救小屋を品川・板橋・千住・内藤新宿に建設。在方の富農は、村の困窮人を救助せよ、と関東取締役所から命じられて請書に連印をした) |
| 8年3月22日 | (蒞山の江川太郎左衛門役所から貧民救方の廻状が来る) |
| 8年4月1日 | (蒞山代官所に呼び出されて極窮民への御貸付金を各自分相応に差し出す事を命じられる。忝人6両ずつ、兩名主村役人の5人で30両である) |
| 8年4月12日 | (山田慎蔵(代官江川の公事方手代)殿日野宿旅宿に平九郎が伺った。近隣村々は差出金の事を今日・明日中に決めて早く代官所に納めなさいと命じられた) |

- 8 年 4 月 13 日 (山田殿から 14 日夕方が期限だと次郎兵衛が命じられる)
- 8 年 4 月 15 日 (日野宿の近隣村の差出金は柴崎村も加えて合計で 130 両となる)
- 8 年 5 月 10 日 (文化 6 年の差出金の事で葦山へ出頭命令。飢饉年に火災にあった柴崎村の善八と礒五郎に次郎兵衛と差添人 2 人が出発)
- 8 年 5 月 13 日 「文化 6 年中差出金之義御代官様思召を以窮民救之ため武・相・駿・豆四ヶ国之分一同御下ヶ金御伺ニ相成候処五分通り御下ヶニ相成候ニ付き 当人及飢候程之ものは格別 其余之分は先達て差出金之振合を以て 七ヶ年置居之上 御下ヶ可相成段御理解ニ付き 善八は其通り御受 礒五郎義は御下ヶ相成候様願書差出置」
- 9 年 1 月 25 日 (柴崎村と日野本郷村は差出金の半分の手形に領収印を押す)

次は個人救済についてであるが、善八・礒五郎とも天保 7 年に火災に逢ったのであろうが、それが何時で、被害額はどの位なのかの記述がない。

多分礒五郎の場合、天保 9 年 1 月 25 日におりた 5 分金の下付を受たと思うが記録なし。善八に関しては「その通り」では拝借金なのか、5 分金なのかの判断は出来ない。これが日記の限界である。

幕府の御貸付金の資本金が農民からの差出金の内、半分が当てられたことが文化 6 年(1809) からだと先例からわかった。差出者にはその返金が 7 年後である。つまり 7 年間に利子付きの御貸付金として運用され、資金提供者にもいくばくかの利子付きで返金される。集められた差出金の内、5 分金と呼ばれる残りの金額は、困窮人の救助に充当された。

- 8 年 12 月 8 日 (関東取締役所から奇特の人の貧民救方(豪商農の寄附行為)の有無を調べよと命じられる)
- 9 年 1 月 22 日 (日野宿組合村大小惣代日野宿会合、関東取締より奇特人の貧民救いの調査)
- 9 年閏 4 月 26 日 (小池三助殿に貧民救奇特の者は先日書面提出した通り、柴崎村には居ませんと答えた)

この段落は取調出役小池殿の、困窮人を助けた人の調査であるが、居ないと答える。その返答の意味は

1. 幕府が行うべき救済だと考えている。それは 8 年 3 月、既に村民中で上は金 2 両ツツ、中は金 1 両ツツ、下は金 3 分ツツ約 20 人から集めて困窮人 100 人に穀物で配った。続けて 8 年 4 月には村役人 5 人で金 30 両の差出金上納したばかりである。
2. 幕府政治に対する無言の批判だろう。奇特人取調べに関しては、豪農・豪商が存在しないだけでなく、西の丸再建費用の募金問題が平九郎の脳裏にあった。

少し「日記」から西の丸再建費用募金について見よう。

- 9 年 4 月 1 日 「西の御丸御普請に付き御手伝被 仰付」と 3 月に大名・旗本に

命じられた再建費用募金の事を知り、いずれは百姓・町人にも同じ命令を予見していた。

当日は日野宿に巡見使一行が来て大騒ぎの最中にもかかわらず、大名に出された再建費募金を記録する。

- 9 年 7 月 12 日 (葦山代官所から柴崎村の 5 人が名指しで呼出される。平九郎・元右衛門・宇右衛門・紋次郎・三七である)
- 9 年 7 月 24 日 (次郎兵衛が葦山役所出頭。名主兩人と元右衛門の 3 人で金 20 両差出すと申しあげたら、両名主は 7 両ツツ、元右衛門は金 6 両との御沙汰が下る)
- 9 年 8 月 10 日 (五日市村内山安兵衛 (あきる野市、質商)・元木村 (八王子市) 中嶋仙助 (未詳) 150 両ツツ、夫以下 100 両・50 両ツツ都合金 1,000 両 (中略) 多摩郡県内共 1,800 両、豆州 1,200 両 ム 3,000 両調達と次郎兵衛が八王子出張中の山田頼助殿より聞かされる)¹¹⁾。

『五日市町史』によれば、慶応 2 年の武州一揆の出費 550 両の内、内山安兵衛は 400 両の寄付をしている豪商である。これは村を護る為に近隣村々に加勢してもらった農兵への謝礼と当日の飲食費・防衛用品代の殆どを支払った事になる。柴崎村は豪農・豪商の存在する街道沿いの宿場や市場村とは違う。飢饉後の柴崎村に対して、村民救済と、差出金 30 両と西の丸再建金 20 両上納の命令に応じた事で充分という判断であろうか。

実は 3 月、幕府は西の丸焼失に付き、諸大名に再建手伝い、万石以下に上納金を命じた。

4 月 1 日に多摩地域の村々は、触で承知していた。代官所出役が 8 月 6 日・7 日・8 日・9 日と「金談に付き」と連絡、又は訪問するのでこの辺で何等かの感触を得ていたであろう。また「日記」では貨幣改鑄や、衣食住儉約令からも、幕府財政の窮乏を察知していた。この経緯は同時進行している。

これは「はじめに」で引用の大藤説「民衆が自らの再生産活動生活の場である「家」と地域社会を守っていくためには変動する政治・社会・経済の動向」を把握し、対処している事を物語る。

村内で行われた 8 年 3 月 13 日の救助報告もされない。

III. 村内の助け合い

多摩地域について少し触れよう。多摩は近世初頭、承応 2 年 (1653) 玉川上水開削後の分水による開発で新田 41 ケ村成立。寛文 6 年 (1666) の「諸国山川掟」でとまるが享保期の武蔵野新田開発と治水・用水で新田村は 82 ケ村成立した¹²⁾。

多摩地域の産物を挙げると、石臼の伊奈石、軍道紙 (五日市)、成木石灰、青梅縞、柿渋 (青梅)、薪、案下炭 (八王子)¹³⁾、御用鮎 (多摩川中流域村々)、栗林・栗山 (小金井・田無・三鷹・保谷)、養蚕、製糸、織物 (八王子) 等¹⁴⁾。

◎表 3 村内困窮人に対する村内救助。天保 8 年に 7 回あり、内容は救助に関してのみである。

2 月 16 日	(困窮人救助について村役人・重立百姓が相談会を開く。生活に余裕ある身元宜敷者約 20 人を上・中・下の 3 段階に分けて、上は 2 両ツツ、中は 1 両ツツ、下は金 3 分ツツ集める。そのお金で大麦と稗を買って、約 100 人に分配と決定し、3 月・4 月の生活を保障しようとする)
2 月 20 日	(16 日にあがった寄付候補者を次郎兵衛宅に集めて、協力を依頼する)
3 月 4 日	(救済用大麦を常八に金 3 両を手付金として、砂川村に買い付けに行かせる。1 両に付き 4 斗 8 升替えの予定。明日は常八と吉之助が村内で買い集める予定。三七は府中の穀屋 沢木屋へ行く予定)
3 月 5 日	(常八と吉之助が村内で買集めた大小麦・粟・稗は合計 10 石。常八は昨日の大麦を次郎兵衛宅へ運ぶ)
3 月 6 日	(三七は府中から大小麦を名主宅へ運ぶ。常八は谷保新田へ稗買出しにゆく)
3 月 8 日	(谷保新田から稗を買い取る)
3 月 13 日	(困窮人に穀物を配る。单身所帯の人には 1 斗 5 升。2 人以上は 1 人前 1 斗 2 升ツツ。百姓株の本人や成人した息子は除かれた。老人・子供・女性にも手当てをした。ただ大小麦・粟・稗と 3 種類あるので籤引きをし、現場には村役人と寄付した人が立会った)

前節でのべたように幕府や代官所も対策を立てた。しかし 3 月・4 月の端境期はまだ不足だと判断した名主や村役人が、有力農民達と相談して公平なランク付けでの均一募金は短期間に集められた。村内に約 100 人とは、人口 1,000 人余の村にしては多く 1 割近い。残念ながら、寄付金総額がいくら集まり、穀物の全量がどの位用意出来たのかについては記事が無い。8 年の「日記」から米・穀相場で米・大麦、粟の相場を見る。2 月 1 日(米相場 銭 100 文に対して白米 3 合 8 勺、大麦・粟 1 両に付き 4 斗 5 升) 2 月 16 日幕府の諸色値段引下げ令が出て日野宿で大小惣代が(銭 100 文に付き米 3 合 7 勺)と相談した。4 月 25 日「田堀丸山(立川市砂川九番の米穀商)にて米小売 4 合、此辺 3 合 5 勺 4~5 日雨天につき諸穀 4~5 升值上げ) 5 月 1 日「所沢(相場)金一両に付き米二斗二~三升 大麦四斗一~二升」とある。天保 10 年 12 月「米相場下落 江戸在とも八斗七八升替より下物壺石位迄也 殊に江戸前入津多く諸品下落 砂糖別して下落の由也」に比べると物価高である。幕府 3 回の救助でも不足し、村民による募金(自助)活動では、端境期を賄う程度であった。

- ・ 夫食拝借現物 2 回と再願金 45 両の配布の時間的経過に比べて、迅速だった。
- ・ 農民は、自分の家経営だけ考える訳でなく年貢村請という共同体でもあるので、村社会

の互助精神と平等精神もあろう。それは 3 段階に分けた募金の各階層均一であることからの推測である。

◎表 4 個人による、又は個人に対する助け合い、8 件である。

8 年 4 月 29 日	(行倒病人を菩提寺の普濟寺内の心源庵地内に小屋を作り、収容。その食費を村で賄う事にして村番人に世話を依頼。同日、大和田下にも行倒人の親子 3 人が乗り物で運ばれて来たので柴崎村に泊める事にした)
8 年 5 月 1 日	(昨日の 2 組の行倒人とも普濟寺下の小屋に収容、村で面倒を見る)
8 年 6 月 14 日	(夕方上草花村(秋川市)女道心(半僧半俗の下級宗教者)が訪ねて来て、一夜の宿を頼む。鈴木家で夕飯は与えたが、宿は富八宅を紹介した)(同日、同様に彫物職人が来たが、夕食のみ与えて府中宿を勧めた)
10 年 2 月 10 日	(山中七之助の妻子に対して 5 人組を差し置いての扶助は出来ない。そこで 5 斗入り粟壹俵を貸し与えた)
10 年 2 月 17 日	(村内は此節色々と助成する事が多い。尾州鷹場御案内の井上家と名主中嶋家と、鈴木家の 3 軒で寄付をしたが詳細不明である)
10 年 10 月 25 日	(青梅の大柳村重右衛門が長く病気で働けない。同情した人は寄付をお願いしますと羽村村役人の坂本氏・指田氏が添え書きした書簡を持って、重右衛門の組合の 2 人が養情講と名付けた帳面持参)
10 年 11 月 4 日	(柴崎村の無住満願寺に尼僧が仮住して村人の日雇仕事や先祖供養で細々と生活していた。そこへ国許の加賀から知合いの女性親子 5 人が困窮していると連絡があり相談される。平九郎が母親は中嶋家、娘 1 人は井上家、他の 1 人は山中の弥次郎家にそれぞれ奉公先を決めて呼寄せる事にする)
10 年 11 月 13 日	(大柳村の重右衛門養情講に村人の寄付金を集め、中嶋氏から羽村へ送る)
10 年 12 月 17 日	(浪人妻子連れの 7 人が訪ねて来た。九ヶ村用水の内 6 ヶ村組合(流末の柴崎村を含めた 6 ヶ村)の分として銭 300 文を渡し、後に 6 ヶ村から集金。個人としてでなく 6 ヶ村まとまったの施しである) ¹⁵⁾

以上天保 8 年は村入用で行倒人の収容をしている。また鈴木家で夕飯の世話をしているが、宿泊は断った。天保 10 年は村の七之助妻子に粟 1 俵を貸した。

大柳村の重右衛門養情講と加賀の女性親子 5 人に対する就職斡旋は村境を超えた助け合

いの例として注目される。身元も人物もよく分からない人たちへの暖かい支援には、柴崎村 1ヶ村を超えた善意が感じられる。

◎表 5 柴崎村を通過した人々

天保 8 年に 10 件、9 年は 2 件である。天保 8 年に素人乞食多しの記事が 2 回、10 月に（遠国ものに付き其の仮差置く）の記事がある。また素人乞食とは、俄乞食を指している。

10 中 8～9 は女性である。そこには経済的に自立できない姿がある。家制度の中で例外としての名主妻以外は既婚女性の経済力は低く、また職種も少なかった。

同じく 3 回あるのは盲目女性で、8 年 6 月瞽女 5 人、9 月瞽女 8 人・同月瞽女 5 人。社会的弱者のこの人たちはどんなに苦しかっただろうか。

浪人者は 8 年 10 月に 7 人、9 年 3 月に子供連れの 7 人が通過した。

8 年 10 月 巡礼の妻子連れ 4 人は鎮守拝殿に宿泊させる。以上の天保 8 年～9 年に村を通過した人々の記録から、飢饉後には江戸に流入した人々だけでなく、凶作の村で生活出来なくなり漂泊する人がいた事を学んだ。江戸周辺農村、つまり多摩地域では多数の放浪する人々が存在した。同時に犯罪事件も増加している。

◎表 6 村の盗難関連から（1 件ずつ一括）

盗難被害の件数を見よう。3 年間に 61 回の記事があるが件数は 21 件である。

8 年 6 件 別に未遂 2 回。1 月と 2 月に中嶋家が狙われたが未遂に終わる。

9 年 9 件 別に未遂 1 回。9 月に鈴木家の文庫蔵の窓の鉄網が破られたが被害届無し。

10 年 6 件¹⁶⁾

次に各年別に被害品目の特徴を見よう。

8 年の 4 月 4 回の被害は食料。穀物 3 回。大麦・挽割等に芋泥棒。4 月に芋泥棒除けの共同祈願をする。6 月に普済寺夜盗 2 人が有り合せの銭 400 文を盗む。6 日亦右衛門女房が押込夜盗に入られたが外へ飛び出して叫んだので金 2 朱だけの被害。鉄次郎・市郎右衛門は各白木綿 1 反。飢饉のあとだけに食糧の盗難が多い。

9 年は、衣類が 3 件、繭 14 枚分、別に金 1 両や銭 5～6 貫文など。閏 4 月満願寺留守居の夜具・鍋まで盗まれる。少し金目の品と現金が盗まれている。

10 年は、衣類が 5 件。普済寺に 2 回、衣類と土佐画金屏風。換金しやすい衣類と高価な屏風が盗まれた。

印象的なのは 8 年 4 月 6 日「台・滝之上・はけ・山中一同此節芋盗人多く難儀に付き世間に習い藁人形造り 竹槍を以て呪詛いたし候講中不残罷出 富士塚道端之飾置 立川院を以て祈念」柴崎村の 4 集落の農民が端境期の 4 月に集まって、盗賊除けに藁人形を作り修験の立川院に祈祷してもらった。芋盗人に見立てた藁人形を竹槍で刺したものを富士塚の道

端に置いたが、その後も穀物被害が出た。以上が各年度の特徴である。

また鈴木家の未遂事件は、文庫蔵の下窓鉄網を引外して盗賊侵入。2 階の箆筒 3 つ、櫃 1 つを残らず金目のものを捜して、妻嘉代の銀の簪と銀の箸、金 3 朱か 1 分だけ盗まれる。「誠に奇異の盗賊なり」と記れるほどで、鈴木家では被害届は出さない。多分その後に犯人逮捕後、盗品確認などの煩わしさを避けたものと見える。

これらの記事からわかるように、盗難は名主に届けて、被害品の詳細を記した書面を火付盗賊改役所（御先手頭の拝領屋敷）に提出。その盗賊が逮捕されると、被害者の最寄組合親村（日野宿）に預けられ、火付盗賊改出役に引渡される。火付盗賊役人は盗賊からその盗品について取調べ、被害届の品物と照合し、被害者も組頭差添えて出頭を命じられる。両方の話が一致してから口書（調書）作成のため八王子と府中へ呼出される。どちらも寄場組合の親村で仮牢の施設がある。火盗改は旅籠で調べる。

8 年 10 月から 11 月にかけて、柴崎村無宿伊之助が砂川村で捕縛されて日野宿の牢で盗みだけと判明し、赦免され拝島小屋頭へ預けられた。

30 口余りの盗品は残らず柳原へ売却した。被害者に八日市宿（八王子市）油屋三郎右衛門もいた。また貫井村（小金井市）で大麦 5 斗を盗み、染谷村（府中市）に売却が判明。被害者と、故売買人の又市や質屋菊次郎も呼び出された。盗品と承知で売買した者である。軽い犯罪として御赦免となる。親類の日野宿百姓新吉が身元引受人として一件落着した。火盗改は犯罪者に厳格と考えていたが、名主や被害者からの歎願で寛大な処分をみた。当分は拝島村喜之助に引き渡し、経費金 2 分を渡す。後にその費用を集めた。誰から集めたのかについては記事が無い。

9 年 9 月に丸屋重右衛門方に 3 人の押込夜盗が這入った一件では、5 日後に 3 人とも捕縛された。しかそして府中宿に火方役所 先手組落合長門守組（旗本）の糸賀・小川氏が取調官で出張し、天保 10 年 1 月の取調べでは 3 人の犯罪範囲 5～6 里で 300 人も召喚されていた。重右衛門は被害届と同時に取下願を提出。受理されてこの件は終わる。

柴崎村百姓春吉の盗難は、質屋熊次郎が質遣い（盗品と承知の上の売買で罰金）の処分が寛大にも許された。ここにも火付盗賊改の対処に慈悲願（歎願書）提出の効果をみる。

10 年 2 月に火方役所から府中宿に呼出し、3 事件関係者 100 人余も待機中。当村岩次郎は薩摩芋 6 度買取で、罰金 1 両 1 分余。府中・江戸とも差添人までの呼出経費を含めて岩次郎たちの出費とする。

1 ケ村の 1 年間に 6 件から 9 件の盗難とは多い。また当村無宿の誰の犯罪とあるのは、食い詰めての事であろうか。村の助け合いを考えていて、村社会の明暗を見たように思う。上・中・下と自立経営している百姓以外に窮民の存在があった。さらに治安維持が難しくなってきた時代であった。

IV. むすびとして

はじめにで立てた疑問に、天保飢饉の後の村の助け合いについて、幕府の財政困難な事が柴崎村ではどう対処されたかをまとめよう。①病死 12 人、欠落 3 人は他村と比較しないと
ならない。②幕府の対策は夫食拝借や再拝借願書の部分で 3 回に分けて配られた。幕府は
村の貯穀だから翌年にも詰戻しの計画書を出せだとか、村の畑惣反別の 30 分 1 作付け指定
に対して、村では粘り強く何度も交渉した。自分達意思を貫いて 6 年賦とし今回拝借の
詰戻しはその後となる。③差出金については、幕府の金融財政の資本金として半分が遣われ
る事。また 5 人で 30 両という小額にして均等割りな金額に対して、村民の先見性と幕府財
政への批判が読み取れる。

さらにこの前後、代官所役人が何度か中嶋家、鈴木家に金談で訪れるがその内容は記され
ていない。その席で世間話として西の丸再建費用の武家に対する触れが話題になったら、そ
れは一種の情報として受取るかどうかは本人の器量次第であろう。だから他村の高額寄付者
の話しも平然として聞き流せた。柴崎村では 3 人 20 両で済ませる。一つの情報を知識でな
く、智慧として生かした。平九郎は差出金、上納金、村内の救助に関しては先見性がある人
物といえるだろう。最後に本稿の助け合いで平九郎はどのように感じ、考えたのだろうか。
村はずれの甲州街道を通過する俄乞食や、家族連れ浪人や巡礼、また不幸にも行き倒れと
なって村から村へ厄介払いのように送り届けられる村継ぎの人たちを朝夕に見ていたら、せ
めて村内だけでも暖かくと窮民救助を行ったのではあるまいか。20 人の醸金で穀物配給の
件を代官所に届けなかったのはそうした思いであろう。

まだ立ち直らない、8 年の秋に新将軍祝賀の町入り能拝見は限られた人が参加するが、そ
れは無批判に観賞した訳では無く、各大名行列総登城の華麗さの裏を見ていた。また町人共
の見物席を我先にと争う人々の姿にも鋭い視線が注がれる。能見物の帰りの混雑にも言外の
批判が見える。

多摩地域の持つ長所としては、奥多摩の山々から水の恵みをもたらす多摩川がある。江戸
に 1 日で着く距離なので、商業圏（八王子縞市の集荷力、青梅縞、青梅・五日市の石灰、
材木・薪・炭。多摩川中流域の鮎、府中の真桑瓜、小金井の栗、村山付近の製粉。蔬菜など）
を通じた人脈、と情報収集がある。

短所を挙げると、八王子織物や生糸だけが江戸や上方への流通商品で、全国に流通する特
産品が少ないことである。また多摩は①江戸商家（中・下層）奉公人の供給地であること、
②直轄領（代官役所は江戸府内）が多いせいか公儀最前であること、③日帰り観光名所の寺
社が多いことなどが江戸との関係で指摘できるだろう。

しかし多摩地域が大消費都市江戸にもっと多種商品の流通と大きな市場を持っていたなら
ば、豪農・豪商が沢山存在したのではないか¹⁷⁾。

つまり鈴木平九郎は平凡ながら堅実な経営者としての冷静さを持っていた。

さらに日記に記録する事で家経営に止まらず、村政上、又重層的な村々連合の代表者とし

での成長を遂げる事が出来た。

村の助け合いという視点から、幕府の農村政治の一端を見ただけで無く、貯稗の詰戻しに關しての窮民の自己主張や交渉で農民の意識を見た。また放浪する人々の多さがある。それを助けられないまでも、できる範囲の救助をする人間的な温かさを見た。急増した犯罪者に対しても厳罰主義ではなかった事を学んだ。天保 10 年 4 月に、野州合戦場一件とよばれる事件がある。関東取締出役 10 名、火付盗賊改役 2 名、普請役 4 名、御先手 2 名の合計 18 名が贈収賄で処罰される。当時の勘定奉行遠山景元に届いた匿名の投書が発端であった。平九郎は同年 4 月 21 日、5 月 20 日に記録している。小稿の盗難事件の逮捕や吟味、またその処罰を何故火付盗賊改役所なのかは、この背景を抜きにしては考えられない。さらにその事後処理の滞りや、混雑、そして寛大な処罰の理由も同じところに求められるのではないかと思う。18 世紀後半からの商品生産の進展による農村の階層分化が村政担当の平九郎の日記執筆の動機である。この日記については歴史史料としての限界や史料批判の必要があるが、公文書にない具体像を見せてくれた。より多くの研究者の利用を願っている。

今後の課題の一つに、近世多摩の地域性について、より多角的に考察したいと考えている。

註

- 1) 荒川秀俊『飢饉』教育社歴史新書、1979 年。
- 2) 伊藤好一「江戸と周辺農村」西山松之助編『江戸町人の研究』第 3 巻、吉川弘文館、1974 年。
伊藤好一『武蔵野と水車屋 江戸近郊製粉事情』クオリ、1984 年、84-165 頁。
- 3) 大藤修『近世農民と家・村・国家』吉川弘文館、1996 年。
- 4) 増田淑美「公私日記の筆者・鈴木平九郎について」多摩中央信用金庫『多摩のあゆみ』32 号（日記に見る近世の多摩）、1983 年。
- 5) 安永 5 年(1776)「日光御社参人馬請負見積書控」『立川市史』下巻、1969 年、469 頁。
- 6) 『公私日記』第 1 集、「天保 8 年」立川市編纂委員会、1973 年、凡例中。
- 7) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』3、吉川弘文館、1983 年。享保期は置米、寛政期から囲米。備荒貯蓄で郷蔵に収納。飢饉年に拝借したら翌年から返済する。
- 8) 『江戸東京年表』小学館、1993 年。
斎藤月峯『武江年表』2、東洋文庫、平凡社、1968 年。
- 9) 小林茂『近世上方の民衆』教育社歴史新書、128-135 頁。
- 10) 日本史用語辞典編纂委員会編『日本史用語辞典』柏書房、1979 年。
- 11) 「近世 幕末の打こわし」五日市町史編纂委員会編『五日市町史』、1976 年、634 頁。
- 12) 村上・馬場・米崎『多摩の代官』たましん地域文化財団、1999 年。村上直・荒川秀俊編『江戸幕府代官史料一県令集覧一』吉川弘文館、1975 年。
- 13) 「特集 多摩の産物」『多摩のあゆみ』44 号、1986 年。
- 14) 「特集 江戸城御用」『多摩のあゆみ』59 号、1990 年。
- 15) 「近世村落の景観と農民の生活一用水」昭島市編『昭島市史』、1978 年。「日記」にある柴崎村 6

ケ村は川下の柴崎村から見ると郷地村・福島村・築地村・中神村・宮沢村である。

- 16) 「表 6 柴崎村の盗難関連」から盗難被害者名を 1 年分ずつ。

天保 8 年 下和田八郎右衛門 忠兵衛 與兵衛 弥 [] 亦右衛門 普濟寺 新屋敷 鉄次郎 市郎右衛門の 8 人

天保 9 年 滝の上 音吉 同亀吉 満願寺 下和田 佐五兵衛菊隠居 宗七 横町 重蔵 下和田 重右衛門の 8 人

天保 10 年 滝之上 春吉 はけ 紋四郎後家 普濟寺 亀吉 市左衛門 滝之上 弁松 芝中平蔵 上の原 清助はけ 丑之助の 9 人

- 17) 伝田功『豪農』教育社歴史新書、1978 年。

表1 夫食拝借、貯穀 天保8年～同10年（幕府・代官所の救助活動）

年 月 日	摘 要
8・1・2	（天保7年）去年極月廿八日に夫食相続拝借貸渡
8・1・17	貯穀詰戻 去申年（天保7年）分年延願書
8・2・2	夫食相続拝借御割渡として御支配町田亘殿御出役
8・2・10	日野宿夫食相続拝借 小前帳番役人より当所において差出す
8・2・23	御貸付方御出入宿 馬喰町馬場三河屋吉兵衛より差紙の飛脚
8・4・9	村内困窮人相続夫食拝借再願 人別（宗門）取調下帳出来
8・4・10	夫食拝借再願 宗門人別帳上納其外にて次郎兵衛出府
8・4・17	窮民共夫食再願小前連印 昼後次郎兵衛方にて調印
8・4・18	村々差出金納ならびに夫食再拝借願小前帳納として次郎兵衛出立
8・5・10	夫食再拝借窺兼候事 当村類焼人之分追々御下ヶ金ニ相成
8・5・13	夫食再拝借金四拾五兩壹分余受取帰村 磯五郎御下ヶ願書差出置
8・5・16	夫食再拝借人別にて割渡ス
8・8・24	当年豊作に付き貯雑穀可詰戻段御直印御触有之 村役人会合 一同極疲れ居 殊に風損等申立 御聞済無之候ハ、中以上之百姓計詰戻し候積 可相願事に相談決着之事
9・閏4・15	御役所より貯稗小前持高之内 三十分一作付之急廻状日野宿より受取 小川江継ぐ
9・閏4・19	当戌貯稗之義 小前持惣反別三十分一作付小前帳差出 村役人会合 惣百姓一同上・中・下三段位に引分ケ不残作付と相談相決める
9・6・1	貯稗作付小前帳案書持参 次郎兵衛出府
9・7・9	御取締方より申渡の貯穀一件相談 日野宿にて大小惣代会合次郎兵衛出勤
9・7・11	御支配所三十分一貯稗作付
9・7・12	困穀御案文写相済
9・8・12	御改革組合村々貯穀下調帳小惣代より〔虫損〕
9・8・20	御取締掛り困穀清帳 次郎兵衛方にて相認
9・8・28	御改革組合村々困穀名前調印会合として次郎兵衛日野出会
9・9・7	今夜年寄会合 関東御取締方え差出候困穀名前之もの呼出調印申付る
9・10・1	当御支配所村々貯穀年延願の義につき最寄村々日野宿会合次郎兵衛出勤
9・10・9	貯穀御割賦半減積立願いとして次郎兵衛出府
9・10・14	貯稗三十分一作付積一年延願御聴済 先年拝借の分当年より六ヶ年詰戻候分は急度可積立旨被仰渡
9・11・4	貯稗御下ヶ穀六ヶ年賦詰戻小前書上帳 村控共清書
9・11・5	貯穀詰戻 小前帳え連印取之
9・11・18	夫食拝借返納小前帳相認る
9・11・29	去々申暮 去酉春両度相続拝借返納今日取立 柴崎新田共村役人立会

註、引用ではないが、なるべく史料に忠実な摘要に心掛けた。

表2 困窮人救い方の差出金（なるべく史料に忠実に）

年 月 日	摘 要
8・3・14	窮民御救小屋江戸廻り〔 〕宿に取立専ら御世話有之 在々において身元宜敷者共より救遣候様御取締方より御触御受連印として日野宿会合
8・3・22	葦山御役所より貧民救方之義に付き御廻状来る
8・4・1	平九郎・元右衛門・三七・紋次郎葦山御役所にて極窮民え御貸付けニ可相成金子 分限に応じ可差出申（壹人六兩ツ、五人にて三十兩）
8・4・12	山田殿旅宿（日野宿）江平九郎罷出 当最寄村々差出金今明日中取究 早々御役所江可相納被申談
8・4・13	山田殿より同宿最寄村々差出金 十四日夕方迄に次郎兵衛江相渡候やう申付ル 村内差出金集る
8・4・15	村々差出金 当村共合金百三拾兩余也
8・5・10	文化六年中村々差出金之義に付惣代を以可罷出段御達有之 当村類焼人之分 善八・礒五郎に付き次郎兵衛、差し添人式人召連今朝出府
8・5・13	文化年中差出金窮民救之ため五分通り御下げに相成 当人及飢候程のもの先達て差出金之振合を以 七ヶ年居置之上御下げ可相成段の由 善八はその通り御受 礒五郎は御下げ相成候様願書差出す
8・12・8	日野宿より御取締より□酉年中貧民救奇特のもの取調べ来る
9・1・22	関東取締方より去暮中御触有之 組合内奇特人去年前後貧民救方取調 大小惣代日野宿会合
9・1・25	当村 本郷村とも五分金御手形奥印相済
9・閏4・26	小池三助殿 去年中貧民救奇特之者有無取調 先日差出候書面通り奇特の者無之

表3 村内の助け合い 天保8年（なるべく史料に忠実に）

年 月 日	摘 要
8・2・16	村内極窮民救方等相談 村役人・重立百姓会合 身元宜敷者上・中・下段に仕訳 凡式拾人程 上金式兩ツ、中壹兩ツ、 下は金三分ツ、出金 大麦稗買入 人数百人程之所え割渡シ 三・四兩月之手当為致候積決着
8・2・20	今夜身元宜敷百姓共 次郎兵衛方え呼寄 窮民救方之儀申付ル
8・3・4	窮民救穀買入 常八砂川にて大麦四石を兩ニ四斗八升替にて手付金三兩渡す明日は常八・吉之助にて村内買出し 三七は府中沢木屋え同断遣わす
8・3・5	常八・吉之助村内穀物買出し 大小麦・粟・稗等にて漸拾石に過ぎず 常八砂川大麦今日駄賃馬にて次郎兵衛方え引き取
8・3・6	三七買出之大小麦駄賃馬にて次郎兵衛方え引取 常八谷保新田え稗買出し
8・3・8	今日 谷保新田にて買入候稗穀引取
8・3・13	村内極窮民救穀割渡シ 壹軒壹人のものへは壹斗五升 式人以上は壹人前壹斗式升ツ、 百姓株当人ならびに成長之悴は除之 老少女人の分手当遣す 尤大小麦・稗・粟等に付 鬪取にて渡ス 村役人 出金人立会

表4 個人による、または個人に対する助け合い 天保8年～10年

年 月 日	摘 要
8・4・29	行倒病人 心源庵地中え小屋掛いたし 同行之もの番非人より村入用にて食用手当致遣わす 大和田下ニ行倒もの壺人あり 駿州之もの夫婦子三人壺ツあんだニ乗せ足立郡より継出し 青柳より送り来たり当村ニ止宿為致候事
8・5・1	制札場と大和田下両所行倒人とも普濟寺下河原江小屋かけいたし入置
8・6・14	夕刻上草花村女道心壺人宿乞い来る 夕飯為給 富八方ニ遣わす彫物職人同断 夕飯為給 府中え遣わす
9・閏4・18	滝の上亀之助厄病にて取続兼 町内ならびに台 山中迄合力として滝の上一同月番差添来る金壺朱 白米貳升助合遣わす
10・2・10	山中七之助妻子扶助相成兼候につき五斗入り粟壺俵貸し遣わす
10・2・17	村内は此節色々助成多し 井上・中嶋三家にて寄付
10・10・25	青梅大柳重右衛門長病相煩 四方憐憫に預り度由にて羽村坂本氏指田氏添書いたし組合之もの兩人養情講帳面音物持参 尤当村兩名主・元右衛門同商売之もの也
10・11・4	満願寺尼僧方え国元加州よりしるべの女人親子五人連にて困窮仕詰便り参り 右之内母壺人は中嶋にて引受下女に召仕 娘壺人は井上 壺人は山中弥次郎方え引請 世話いたす
10・11・13	大柳重右衛門養情講助成村方の分取集 中嶋氏より羽村え送り遣わす
10・12・17	浪人妻子連れ七人来る 六ヶ村組合分銭三百文遣わす

表5 天保8年と9年に柴崎村を通過した人々

年 月 日	摘 要
8・1・14	鳥追の穢多来ること貳百人余
8・1・21	此節米穀直段上ル 男女素人乞食多し 但十に七八〔以下なし〕
8・2・1	当節及飢餓難儀のもの多きよし、此辺にても殊之外難儀の多く 素人乞食益々多し 十に八・九は女也
8・6・14	瞽女五人同断（宿乞い）来る
8・9・10	萱之中え非武人躰之もの這入臥居候由にて 川原江小屋掛け可遣之処今曉遠足〔虫損〕成候事
8・9・16	中仙道筋 瞽女八人止宿願来る 五人相止 三人郷地え遣わす
8・9・23	金子村 瞽女五人止宿為致候
8・10・5	昼時厄介連浪人もの七人来る 神田之者の由妻子四人連巡礼宿願来る 鎮守拝殿江遣わす
8・10・18	諏訪林に乞食にて 遠国ものに付き 其俵差置
8・11・2	下和田下にて盗人躰のもの貳人の内 壺人番非人差押来る 信州〔 〕にも不相見故夜に入りはなち遣わす
9・3・13	昼後浪人もの男女子供連七人組 来る
9・4・15	留守宅え日野宿より送りもの継来り 青柳え継
10・4・30	常州茨城郡座頭林弥 ならびに女房なお兩人の病者 相州足柄郡関本村より当四月廿六日継出し郷村送りもの日野より継来る 夕刻に付き番非人方江止宿致させ候事

表 6-1 天保 8 年～同 10 年 柴崎村の盗難関連（各 1 件ごとにまとめた）

年 月 日	摘 要
8・1・11	今夜中嶋江盗賊入らんとして成らず
8・2・23	今夜中嶋氏え盗賊入らんとして不成
8・2・24	昨夜中嶋氏え盗賊入らんとして不成
8・3・21	今夜下和田八郎右衛門方え盗賊 衣服十品ほど被盜
8・4・6	台・滝の上・はけ・山中一同此節芋盗人多く難儀に付 世間に習い藁人形造り 竹槍を以て呪詛いたし候講中不残罷出 富士塚道端之飾置 立川院を以て祈念
8・4・7	昨夜滝の上忠兵衛方にて 穀物色々被盜取候由
8・4・9	夕べはけ與兵衛方にて土蔵鍵盗出し土蔵え盗人這入 挽割石盗取候由
8・4・25	昨夜横町弥 [] 金子田堤外田にて五畝分程大麦穂を摘盜取候由
8・6・6	滝の上亦右衛門方え押込夜盗忝人 亦右衛門ハ他出にて女房表え驅出し 声を立候に付 有合金子式朱盜逃去候
8・6・22	村番非人府中無宿忝人差押え之處当村内にては盗いたし候様子無之に付き直に放し遣わす
8・6・25	昨夜普濟寺え押込夜盗忝人 下男縛候処住持外へ欠出し 人数を集候ニ付き 有合四百文盜取逃去候事
8・9・8	当村百姓忠次倅万蔵御召捕 新屋敷鉄次郎・市郎右衛門白木綿袴反ツ、紛失之書面差出御取繕相願 親忠次 村役人より万蔵御慈悲願差出ス
8・10・21	今日当村無宿伊之助 砂川村にて差押拜島村に引き渡す
8・10・30	砂川村にて捕押候当村無宿伊之助儀 太田平助殿え差出候に付き昨日拜島村え御越
8・11・1	伊之助一件ハ先日奈良橋村寺院に押込入 住僧及殺害候 内捜手配哉、大田殿北筋之御越亥之助 日野宿御預りに相成 追て火方え御引渡
8・11・21	火盜改 落合長門守様御組中山登右衛門殿より呼出 当村無宿伊之助掛り合 平八ならびに被盜主喜太郎・吉之助・質使又市、質屋菊次郎御呼出 八日市宿油屋三郎右衛門方御用宿也。貫井村にて大麦五斗盗み染谷村え売渡 其余三拾口余不残柳原え売渡候趣 格別之御仕置にも相成間敷御慈悲願方可然の由親類日野百姓新吉呼寄 一同止宿
8・11・22	伊之助一件 貫井・染谷・当村引合一同呼込 御赦免の上引受人新吉え引渡相済 会所其外謝礼 伊之助は拜島村非人 [] え引渡 金式分相渡
8・11・24	伊之助一件入用取集済
9・2・24	今夜滝の上音吉方にて穀物諸品者置きにて被盜取 茅戸豊次郎同穀物飯等同断
9・閏 4・9	昨夜満願寺江盗人這入 文蔵夜具ならびに飯米鍋其外盜取候よし
9・閏 4・16	昨夜滝の上亀吉方え盗賊這入 江戸出荷物鶏卵数六箇被盜取之趣届来る
9・6・25	昨夜裏甚右衛門方え盗賊這入 衣類三・四品盜取
9・7・8	昨夜下和田佐五兵衛方え盗賊這入 繭拾四枚分盜取候由
9・7・9	昨夜下和田菊隠居え押込夜盗這入 衣類四・五品其余多葉粉入等奪取
9・7・24	三七親宗七方え押込夜盗御届
9・8・3	火方出役金子平右衛門殿当村百姓佐五兵衛、大和屋呼出 当六月中嶋屋喜太郎方にて盗難品の吟味
9・8・4	下和田下甚兵衛盜賊引合に付き屋敷分え村之相談として八兵衛府中行（甚兵衛に挽割忝升つつ両度売渡す）
9・8・6	盜賊引合一件謝礼として 大和屋良右衛門来る
9・9・16	昨夜上の原清助方 盜賊一件に付き 沢七蔵欠落之由
9・9・22	文庫蔵下窓鉄綱引はすし盜賊這入 二階箆笥三つ 櫃忝つ不残相搜 嘉代の銀かんざし 銀の箸 金三朱か忝分ばかり盜取 誠に奇異の盜賊也（鈴木家の盜難）
9・12・30	今夜曉方横町重蔵見世に盜賊 錢箱盗出し 金壺両ほど盜取
10・1・6	去大晦日横町重蔵方にて盜難之義に付当人立川院内談ニ来る

表 6-2

年 月 日	摘 要
9・9・23	昨夜下和田丸屋重右衛門方 押込夜盗三人拔身にて這入 銭五～六貫文 衣類拾品の始末品書相記
9・9・27	盗賊御訴之儀 丸屋重右衛門方ばかり御届いたす
9・9・28	玉川端にて怪敷者三人召捕 丸屋重右衛門方え押込夜盗哉と御取締方へ申達
10・1・22	火盗改落合様組糸賀啓助殿・小川殿 下和田丸屋重右衛門え押込の御札に付き八王子宿江御呼出
10・1・24	丸屋祐次郎 年寄弥五左衛門帰村 中野村無宿押込強盗悪事多分有之六・七里の間引合人は三百人ほどの由 当村重右衛門月日ならびに被盜品其他始末書村々振り合いに習 取捨相願罷帰候
10・2・2	当村百姓熊次郎質遣 滝の上春吉被盜主 呼出状次郎兵衛罷出 熊次郎質遣御慈悲願之積
10・2・3	盗賊引合春吉済 熊次郎は過料 御慈悲願の積
10・2・12	火盗改 先月中砂川村にて取調の盗もの買取調べ 御同組吉田殿府中宿より呼び出し 斧次郎 岩次郎召連れる
10・2・13	(火方役所の取調べ) 一件いまだ差控居候よし
10・2・14	火盗改役所盗賊当たり三口一同持参 百人余呼出 小野次郎 岩次郎共府中宿に逗留
10・2・15	火方一件今日済 薩摩芋六度買取之趣書面差出し 小野次郎、岩次郎帰村
10・4・16	火方改 落合様御役所より招呼れ 薩摩芋買取一件当人岩次郎・村役人來ル十八日馬喰町伏見屋庄兵衛方え御差紙来る
10・4・18	岩次郎父宇右衛門召連次郎兵衛出府
10・5・22	岩次郎引合 火方一件入用不足に付き当人共七人え壺人に付き金式朱ツツ又取立候積申渡
10・7・8	火方落着 過料には不相成 薩摩芋代金壺兩壺分余御取立 又々当人共出金之積
10・2・17	十五日はけ紋四郎後家土蔵え盗賊入 衣類十品盜まれる
10・4・13	今夜普済寺方丈え盗賊 衣類四・五品盜取
10・4・17	普済寺本堂え又々盗賊這入 土佐画金屏風一双盜取
10・5・21	火方出役中西殿当村無宿佐吉事忠蔵召捕 二月紋四郎後家 三月亀吉 四月市左衛門より盜取ル
10・5・22	火方一件に付き次郎兵衛出府 亀吉 紋四郎後家 市左衛門忤次郎吉罷出る
10・6・12	忠蔵盗先当たり糺として岡殿呼出 亀吉 紋四郎後家 次郎吉 平九郎出勤
10・6・13	紋四郎後家九品は預り物故追って御下渡し 亀吉 次郎吉は取捨願相済
10・7・4	(6月12日6月13日の) 忠蔵一件七月五日出頭の差紙到着
10・7・12	十日夜滝の上弁松方え盗賊衣類壺つ 又右衛門方にて衣類五品 亀吉方にて衣類五品三ヶ所にて被盜ル
10・9・3	八月廿四日芝中平蔵方え盗賊 衣類外拾貳品被盜取 弥五左衛門より品書差出
10・9・20	芝中平蔵 上の原清助 盗賊に逢候始末 品物書付差出ス
10・10・21	落合様組鈴木殿より呼出 去霜月中藍縞女袴一件ハ はけ丑之助方にて盗難の品
10・10・22	盗賊引合に付き当人丑之助 年寄四郎左衛門差添所沢町え差出ス (火付盗賊改出役)
10・10・23	はけ丑之助盗賊引合取捨願も相済 帰村

註、引用ではなく、なるべく史料に忠実に摘要を心掛けた。